

P475-5



10月5日から3日間、国立京都国際会館で、「科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム」(STSフォーラム)が開かれた。世界91カ国から最先端の研究者、科学技術担当相、大使、科学技術行政官、学長・研究所長、産業経済界のリーダー、ジャーナリストなど多彩な850人が集まった。

開会にあたっては、世界中のキーパーソンを訪ねて、STSフォーラムを推進してきた尾身幸次衆院議員が講演。野田聖子消費者行政担当相、日立製作所会長、中国科学院長、フロンガ

## ノーベル物理学賞

# 日本の科学技術を鼓舞

スが環境に与える影響を立証してノーベル賞を受賞したメキシコのモリーナ博士らがこれに続いた。21世紀の科学技術の光と影、食品安全、エネルギー、生命科学、科学教育などの問題について、各氏が持論を展開し、健全な地球環境の維持に関しては講演者全員が言及した。

尾身氏は、①人類にとって無限の存在であった地球が有限の存在となったこと②人間も自然を構成する一員であること③専門と国籍・地域を異にする同志が協調しあって共通の課題に取り組む、すべての人々が科学技術を自分たちの問題として認識すべきであること――を訴えた。

今年で第5回を迎えたSTS

フォーラムには、アフリカ諸国からの参加者も多かった。バイオ燃料、農業、食糧問題、環境問題の関連性についての全体会議では積極的に発言し、今後、科学技術の世界で共に手をたずさえっていく姿勢を印象づけた。

会議の最終日には期せずして、ノーベル物理学賞が3人の日本人研究者に授与されることが発表された。このニュースは、突発した株価の暴落に狼狽する日本に光と希望を与えた。これらの偶然の一致は、世界における日本の科学技術のリーダーシップを鼓舞し、今後の日本の行方を示す天の采配であったように思われてならない。

(群馬大学長 鈴木守)